

東京・春・音楽祭

-東京のオペラの森 2013-



東京春祭マラソン・コンサート vol.3

ワーグナーとヴェルディ ～生誕 200 年に寄せて

第V部 ヴェネツィア ― ワーグナーの死～悲しみのゴンドラ

日時：2013年3月23日（土）19:00 開演 会場：東京文化会館 小ホール

ワーグナーは1882年7月、《パルジファル》の初演を終えた後、9月に療養のためヴェネツィアに向かい、翌1883年2月、心臓発作により同地で息を引き取った。その3年後の1886年、ワーグナーの義父にあたるリストは、バイロイトで生涯を閉じた。リストはワーグナーにまつわる小品をいくつか残している。

「イゾルデの愛の死」S. 447の原曲は、1865年初演の楽劇《トリスタンとイゾルデ》の最後を飾るイゾルデの有名な歌である。リストの編曲は1867年に行われており、愛の法悦を奏でるオーケストラの輝きが見事に表現されている。

「リヒャルト・ワーグナーの墓に」S. 202は、ワーグナーが没した3ヵ月後の1883年5月に書かれたピアノ独奏曲である。《パルジファル》からいくつかの動機が用いられており、さらにこの曲は同年、弦楽四重奏用（S. 135）とオルガン用（S. 267）にも編曲されている。

「悲しみのゴンドラ」S. 134は、1882年末にヴェネツィアのワーグナーを見舞ったリストがその地の印象をまとめ、ピアノとヴァイオリン（チェロ）のために書いた作品で、同年にピアノ独奏用にも編曲されている。半音階が多用され、暗く美しい旋律が重い水面のように揺らめく、ワーグナーの死を予感させるような音楽である。

「R. W. (リヒャルト・ワーグナー) - ヴェネツィア」S. 201は、ワーグナーが没した翌月に書かれた曲である。書法は極めて単純化され、言葉少なく、喪ったものへの深い悲しみが表現されている。

「聖杯への厳かな行進曲」S. 450の原曲は、1882年バイロイト祝祭劇場で初演されたワーグナー最後の舞台作品《パルジファル》の第1幕終わりに、聖杯の騎士たちが入場する場面で奏される。モンサルヴァートの鐘の音が、バッソ・オスティナート（固執低音）となって執拗に鳴り渡る。編曲も1882年に行われ、リストにとってはこれがワーグナーに関する最後のトランスクリプションとなった。